

月のおばあさん

作 ラビンドラナート・タゴール

訳 内山真理子

昔むかしむかし月つきのかたすみすみにいた

糸いとつむぎのおばあさん

古書こしょプラーナーナによれば

おんとしななじゅうまんにじゅうさき七十万二十歳。

白しろい糸いとで網あみを編あんでいるもの

いまだに仕しあがっておりませぬ

その網あみで億兆おくちようもの星ほしぼしを

すくいとると誓ちかいを立たてていたけれど。

いつのまにか目めをとじて

いねむりこつくりねてしまい

夢ゆめのなかでそのおんとしを

すっかりわすれておしまいだった。

眠ねむりの道みち中ちゆうまいごになつて

おかあさまのおひざにやってきました



一 糸つむぎ まゆや綿わたからせんいを取り出してよつて糸いとにすること
二 プラーナ ヒンドゥー教きやうのせいせいてんてんのこと

この詩がのっている本
ラビンドラナート・タゴール 著
内山真理子 編訳
『お母さま』(未知谷刊) P96

三じゅうごや つき
十五夜お月さんはにっこりと

あたりに微笑ほほえみをふりまいた。

たそがれ そら み
黄昏たそがれどきに空を見つめて

ふとなにかを思おもいだし

つき よ
月にむかつて呼よびかけた

つき わら
月はにっこり笑わらって聞きいた

りよう かいな たか つき
両りようの腕かいなを高くあげ月つきへ

もどつてゆきたいな

ゆめ みぎわ
夢ゆめの水際みぎわにやってきた

その道みちをたどつて。

そんなときおかあさまの顔かおを

見みあげると

たちまち月つきにもどる道みちを

わすれてしまう。

だれも知らない

もとの家いえも道みちすじも

だれも知らない この小ちいさな娘むすめが

三 十五夜 まんげつの夜
四 黄昏どき ゆうがた
五 水際 みずべ。

昔むかしむかしそのまた昔むかしの娘むすめだなんて。

月つきのおばあさんのおんとしては

世よに知れわたっているけれど――

村むらびとたちは小ちいさな娘むすめを見みると

「六ブリおばあさん」と呼よぶのです。

なによりずっと昔むかしむかしのひとが

なにか不思議ふしぎな呪文じゅもんの力ちからで

なによりもあたらしくなつて

地ちじょう上ようにおりてきたのです。

詩集『童子ボラナート』所収

六 ブリ

古くからベンガル地方では、しんあいの気持ちをこめて、おさない女の子を「ブリ」（おばあさん）とよぶしゅうかんがあります。（『お母さま』注より）